

大阪法務局長賞

「おじいさんの気持ち」

履正社学園豊中学校 二年 三井 みつい 仁 じん

僕の町内は、お年寄りを見守る環境を整えようと努力している。常に声をかけたり、孤立しないように、集まって食事会やイベントを計画したりしているようだ。近所に住むお年寄り夫婦は子どもがいなくて自分達でこまっていたので僕の母が後見人になってもう一年ぐらいお世話をしている。おばあさんは認知症が進んでいて、毎日出歩いてしまう。幸い遠くへは行かないので近所の人で見守っている。母は後見人になってから毎月大変忙しくしている。本来、後見人は日々の生活のお世話までしなくてもいいのだけれど近所で毎日目にするのと放ってはおけないらしく、洗たくやそうじ、時には買物もする。デイサービスにお願ひできるそうだが、おじいさんが、知らない人に何でもたのむのに抵抗があるらしい。夏休みで僕も少しは役に立つことはないかと、おじいさ

んとおばあさんの家に行った。おばあさんは少し前に見たより、大分認知症が進んでいるのが見てとれた。僕は立ちすくむしかなかった。母がさっさと用事しているのがすごいなと思った。庭におじいさんがいたので、話しにいった。おじいさんは庭でトマトやナス、朝顔の種を植えて育てていた。

「これは紫の花がさくんや。」

「ナスは一つだけ残してまた来年のために種をつくとくんや。」

とにこにこして、説明してくれた。まだ少し小さいナスと青いトマトを指さして、

「これ、あと少ししたら、とりにおいで。」

と言ってくれた。うれしくて二日後、また僕はおじいさんの家に行った。すると、じっと庭ですわっているおじいさんが何か様子がおかしい。

「おじいちゃん。」

と声をかけると、だまっている。おじいさんの見ている先に目をやると、トマトやナスや朝顔がなくなっていた。

「あれ、何でなくなってるの。」

と聞いても、だまっていた。

すると、家からおばあさんが出てきた。ごみ袋をさげて出てきた。よく見ると、トマトやナスや朝顔が根元から引き抜いて入れてあった。どうやらおばあさんはそれを雑草とまちがえたのか全部根元から引き抜いてしまったのだ。

「あっ、そんなしたらあかんやん。」

と思わず言ったがおじいさんは

「ええんや。わしがしたんや。」

と言った。僕はだまってそのまま家にかえって母に話した。すると、やはり、引き抜いたのはおばあさんらしい。今回だけでなく、何度もこんなことはあるが、その度におじいさんは、おばあさんをかばうそうだ。母が言うには、おじいさんはおばあさんを認知症だと思いたくないらしい。おじいさんの中では、おばあさんは元気な時のままのおばあさんでいてほしい。他の人から認知症と思われて、そのようにあつかわれたくないのだ。もっと認知症が進み施設に入らないといけないようになったら、とそんな不安があるのだろう。

僕はどうすることもできない認知症の病気の現実と、おじいさんの気持ちを考えると胸がつまる思い

だった。

母は僕に

「おばあさんを責めたり、おじいさんにその事で何も言っではいけない。」

と言った。

そっと見守るといふことのむずかしさを知った気がする。

僕はおじいさんが好きないちじくを買って持っていった。おじいさんは、にこにこして

「ありがとう」

と言って皮をむいておばあさんに食べさせていた。二人ともににこにこして先ほどのことを忘れていたようだった。

「また遊びにくるわ。」
と言うと、

「絶対来てや。」
と二人が言った。

ごみ箱にすてられたトマトとナスと朝顔の苗が見えた。

僕はごみ箱にフタをして家にかえった。